

# オーナー若き日の足跡

愛する緑の大地 4月の日記



1968年2月、私はアルプスの山々を登るために渡欧しました。  
22才の時の事でした。

3月下旬、フランスアルプスにあるブレチエール西壁の冬期第2登を果たし  
冬山シーズンが終了しました。

オフシーズンとなった4月、夏の季節までの足掛け3ヶ月間は仲間3人と共に  
牧場で働かせてもらうことになりました。

これは、その時に書いた日記です。

日記を書いた時から50余年、一冊の手書きの本にしてペンションの本棚に鎮  
座してから40年・・・

その日記を、お客さんの川崎泰照さんが持ち帰り2021年5月から6月につ  
けてご自身のFace bookで紹介してくれました。それをpdfファイルにまとめた  
ものです。

日記は、情報をたくさんお持ちの川崎さんが解説や当時の話題、写真などを加  
え解りやすくして下さいます。

良い人達に恵まれ、山仲間との牧場生活は苦しい事も楽しい事に変えられるか  
けがえのない3ヶ月でした。

そんな私の若い日の思い出を共有していただけたら幸いです。

野口ペンション 野口久義





【往年の名クライマー野口久義さんの事（その1）】

5月1日の昼過ぎに胆沢ダム堤体まで下山し、登った所の遠望写真を撮った。その後すぐ自宅には帰らず、帰る途中の蔵王坊平の野口ペンションに1泊する事にした。毎年厳冬期の蔵王に登る前後に弘前のパートナー福士さんと泊まる定宿だ。今回一人で訪れるのは、前から気になっていたオーナーの野口久義さんの山の蔵書や資料をじっくりと読んでみたかったのだ。

前にも書いたと思うが、野口久義さんはマッターホルン北壁登頂者でその時のパートナーが田部井淳子さんの御主人田部井政伸さんだ。登頂後二人共足指凍傷のため病院で床を並べていた、という。

野口さんは1968年冬にヨーロッパアルプスを訪れ、その時は冬季グランドジョラス北壁を南川和勇さんと目指したのであったが、条件が悪く登れなかった。その後天候が回復し、シャモニー針峰群を眺めていた二人は、その中のエギーユ・ド・ブレッチエールの西壁を登ろうと心に決め、4回のピバークで完登した。地元誌「アルピニスムス」には「1954年に英国のジョー・ブラウンとドン・ウィランスが初登した西壁を日本の南川（26）と野口（22）が3月27日～3月30日にかけて第2登した。（概略）」と報じた。

野口さんと南川さんは、その後夏のシーズンまで他2人のクライマーと共にジュネーブ近郊の牧場で働く事になる（不法就労だが）。この時の1968年4月9日から6月17日までの標高1,000mでの山荘暮らしの経験が、1976年12月から始まる野口ペンション暮らしの基礎となっている。このような自然豊かな所で暮らす事が、野口さんの子供の頃からの夢であったという。開業してもう45年、常連さんの多い素敵な宿だ。

今回ジュネーブ近郊での山荘暮らしの日々を綴った手書きの本「愛する緑の大地」（1980）全163p、写真15葉、本人の挿絵付きの原本を僕が預かってきた。ご本人の了解を得たので、その素晴らしい内容をこれからフェイスブック上で皆さんに読んでもらいたい、と思う。近藤等先生、アンドレ・コンタミヌも少しだけ登場する。

「山と溪谷社」などに掲載された野口さんの多くの登攀記録なども手元に揃ったので順次紹介して行きたいと思っている。

最初の写真は、野口ペンションの玄関前に並ぶ野口御夫妻。奥様の佳子さんは東京北稜山岳会の山仲間だ。

2番目の写真は、エギーユ・ド・ブレッチエール西壁登攀時の野口久義さん。胸に懐かしいコの字型ハーケン（氷用）などが下がっており、昔ながらの装備だ。

3番目の写真は、エギーユ・ド・ブレッチエール西壁の全景写真。野口さんは4ページにわたるルート図と記録を残している。山と溪谷1968年10月号より。

4番目の写真は、「愛する緑の大地」の表紙。器用な野口さん自身のデザインとレタリングだ。昔「アルプ」誌から出版してもらおうとしたらしいが、実現しなかったらしい。



オーナー若き日の足跡 No.2 川崎泰照さんの face book より

【往年の名クライマー野口久義さんの事（その2）小西政継さんからの信頼】

昨日は、野口さんの山歴の中でシャモニー針峰群エギーユ・ド・ブレッチエール西壁冬季第2登について主に書いた。

今日は国内登攀も含めて彼の山歴の概略を書いてみようと思う。材料は野口ペンション本棚の雑誌（山と溪谷、岩と雪ほか）の切り抜きと「東京北稜山岳会の歩み」（2014）だ。

《野口久義さん山歴》

1964年 東京北稜山岳会 入会

1965年4月 谷川岳ーノ倉沢滝沢リッジ

5月 谷川岳ーノ倉沢衝立岩正面壁雲稜ルート～コップ状岩壁正面壁緑ルート

7月 谷川岳幽ノ沢中央ルンゼ（初登）

9月 谷川岳ーノ倉沢衝立岩正面壁岳人クラブルート

1966年3月 槍ヶ岳東稜（積雪期第3登）

1967年8月 剣岳ジャンダルム池ノ谷ガリー側側壁（初登）

10月 谷川岳ーノ倉沢コップ状岩壁右岩壁左カンテ（初登）

1968年2月～9月 ヨーロッパ滞在

3月 グランドジョラス北壁 試登

3月 エギーユ・ド・ブレッチェール西壁（冬季第2登）

6月～9月 グランドジョラス北壁

エギーユ・ド・ミディ南壁

モンブラン

マッターホルン北壁（完登後凍傷で足指2本切断）

1969年 4月 穂高岳慶応尾根～前穂高岳IV峰正面壁～前穂高岳東壁～

滝谷～槍ヶ岳北鎌尾根

8月 剣岳ドーム北壁（初登）

9月 穂高岳屏風岩東壁ルンゼ～前穂高岳IV峰東南壁右壁上（初登）

記録に残っているだけでも輝かしい山歴だ。その後野口さんを慕って1976年に廣川健太郎さんが入会。長尾（山野井）妙子さんも入会していたというが、1976年12月から野口ペンションが開業したので、野口さんとの山行はあまりなかったと思われる。

野口さんは1968年の夏にグランドジョラス北壁、マッターホルン北壁に登っているものの、冬のグランドジョラス北壁には失敗している。1967年冬にマッターホルン北壁の冬季第4登に成功している小西政継さんは「岩と雪13号」（1968）山と溪谷社に「アイガー北壁、グランドジョラス ウォーカー稜冬季登攀の勝算」という論文を書いている。この論文でアイガーは小西さん本人が執筆し、グランドジョラスは野口さんに執筆してもらっている。それぞれの北壁については4ページに亘り詳細な分析がなされている。参考にした方々も多いのではないだろうか。

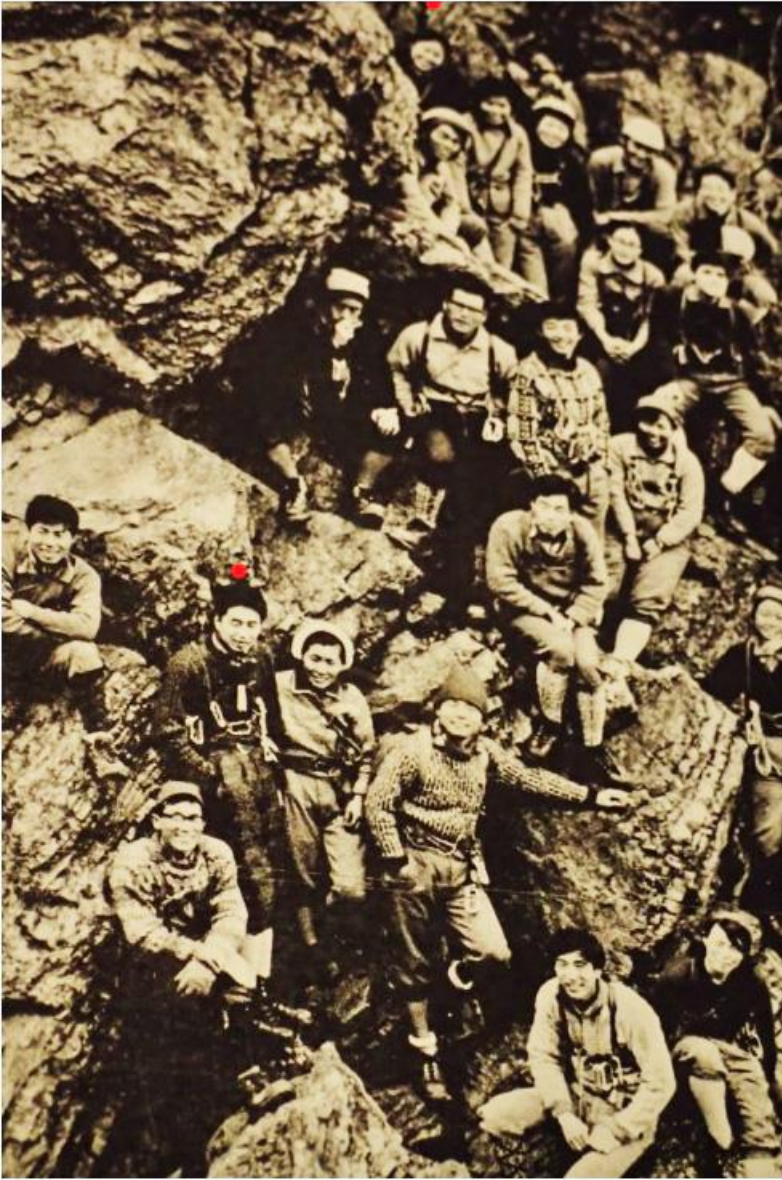
その後、小西さんはマナスルで遭難するまで8,000m峰に通い続けた。野口さんも小西さんからシシャパンマに誘われたそうだが、ついにヒマラヤに行く事はなかった。

最初の写真は、ツツラ岩で登攀訓練をする東京北稜山岳会の会員21人。中央赤丸の下が野口久義さん、最上部赤丸の下が野口佳子さん。皆笑っているのがいい。

2番目の写真は、小西政継さん。僕はシシャパンマの壮行会で遠くから小西さんをお見かけしただけだったが、噂通りラフな服装であった。このようなネクタイを締めた写真は珍しいのではないだろうか。「岩と雪16号」（1969）山と溪谷社より。

3番目の写真は、冬季グランドジョラス ウォーカー稜のルート。「岩と雪13号」（1968）山と溪谷社より。

4番目の写真は、1983年頃の野口ペンション。武藤昭さんの紹介記事「蔵王坊平の自然にアルプスの夢を結んだ岳人 野口久義」。この時野口さん39才、4人家族と愛犬バリーが写っている。バリーはセントバーナード犬、寒さに強く残雪期の芝草平に行くと大喜びで走り回ったらしい。



### オーナー若き日の足跡 No.3 川崎泰照さんの face book より

【野口さんの著書をフェイスブックで紹介する僕の想い】

誰しも人生の中で最も重要でその後の人生を決定づけたと思われる年がある筈だ。野口さんの場合は疑いもなく 1968 年だ。2月に渡欧し、3月に高難度の登攀（ブレッチエール西壁）を成し遂げた後、夏の登山シーズンまでジュネーブ近郊の牧場で働いた。その時につづった日記をもとに書いた本が「愛する緑の大地」（1980）だ。野口さんは出版を望んだという事だが、出版社との折り合いがつかなかったようだ。 厳しい登攀の記録とは対照的な大自然へのあこがれ。この本には 22 才の野口さんの感性と今の人生に至る夢が詰まっている。野口ペンションの本棚で読まれるのを慎ましく待っているよりは、僕の手でできるだけ多くの方々に読んでいただければ嬉しいと思う。

最初の絵は、冒頭の詩「心の花園」に野口さん自身が描いた挿絵。4 人の仲間の内の 1 人は寝転んでいる。

2番目の写真は、目次の次のページ。冒頭の詩「心の花園」が見開き2ページに丁寧な手書き文字で書き込まれ、右下には挿絵が描かれている。

3番目の写真は、「愛する緑の大地」（1980）の表紙。背表紙の厚さは2cmある。中央に鉢植えの花、扉のような枠組みにセンスを感じる。

4番目の写真は、この本を書いた頃の野口さん。鬢（びん）を伸ばす事が流行っていたのだろうか。

5番目の写真は、本文とは関係ないが野口ペンションでお客を出迎えるトトロ雪像。昨年暮れの野口さんの作品。野口ペンションのフェースブックより。

## 【野口久義著『愛する緑の大地』（1）】

### 目次

- 1 はじめに
- 2 緑色の世界へのあこがれ
- 3 四月のたより
- 4 五月のたより
- 5 六月のたより
- 6 おわりに

### 《心の花園》

この緑色の草原はぼくらの園  
緑色の中にタンポポの黄色が  
緑色の中にスミシの紫が  
緑色の中にさくら草のピンクが  
はにかんだようにのぞいている  
ぼくらはこの草原で一日過ごします  
仕事も  
遊びも  
限りないこの緑色の草原の中で  
緑色の空気をすいながら  
よくはれた日  
かわいた草の上をとんであるきます  
露の朝はゆっくりとあるきます  
雪の積もった日は  
ありし日の雪山を想いだして  
斜面を登ったり下ったりします  
この緑色の草原は心の花園です  
自由が満ち溢れています  
誰も何もいいません  
自分でやりたいことをします  
王様です  
でも小使いでもあります  
こんなすばらしい土地が他にあるでしょうか

働けるよろこびと  
 遊べるよろこびと  
 そして生きているすべてのよろこびと  
 この草原はぼくらの心の花園です



オーナー若き日の足跡 No.4 川崎泰照さんの face book より

【無雪期の坊平高原・・・素晴らしい】

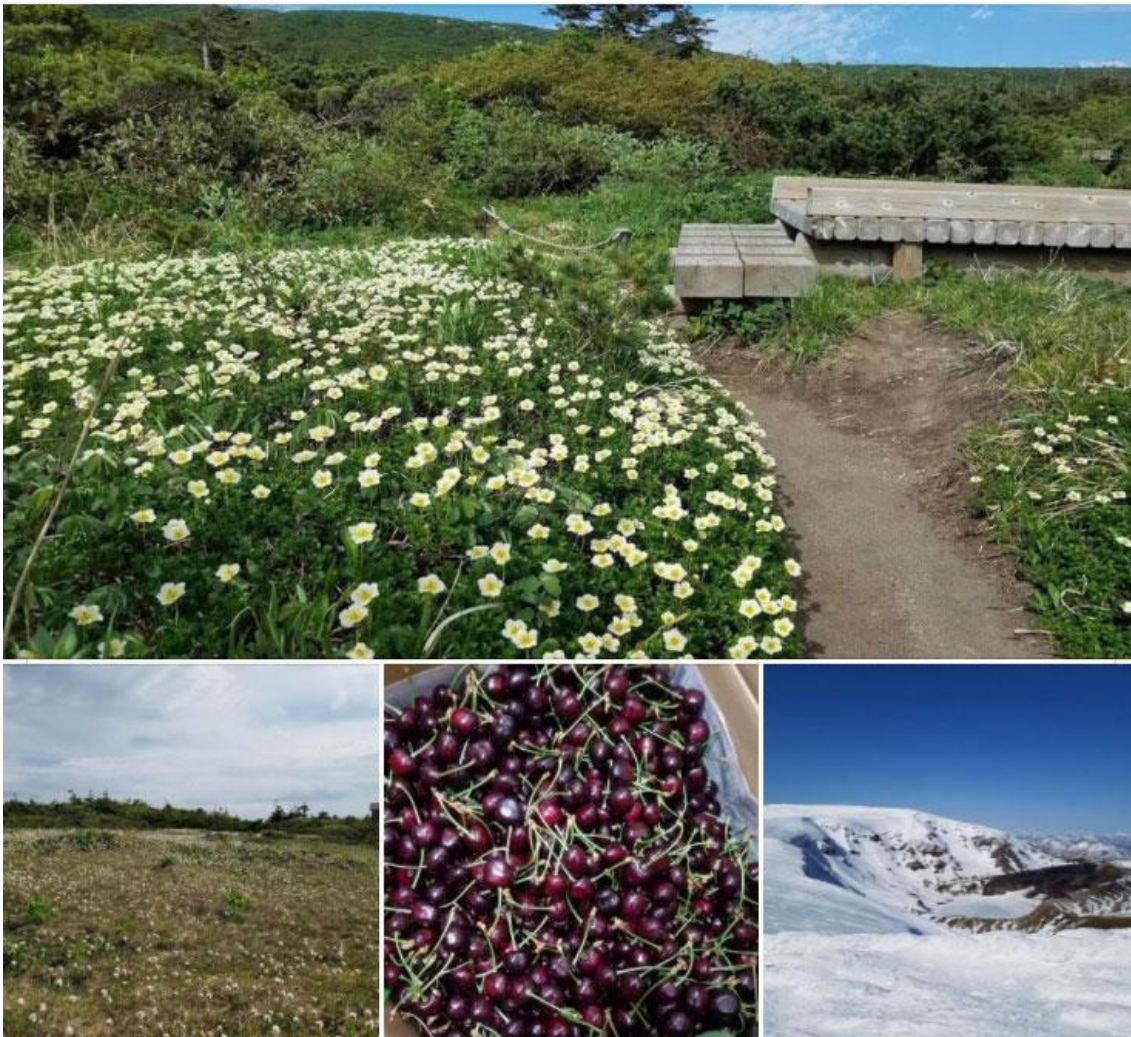
野口さんの文章(1 はじめに)では、半分以上坊平高原の素晴らしさについて書いている。僕はほとんど積雪期にしか来た事がないので、ここでは「野口ペンション」フェイスブックから周辺のいい写真をお借りして皆さんに見てもらおうと思う。

最初の写真は、野口ペンションから刈田岳の方に少し登った所にある湿原、御田ノ神のチングルマ。2020年6月12日撮影。エコーラインから簡単に行けるらしい。

2番目の写真は、同じく御田ノ神のワタスゲ。2020年6月12日撮影。後方に避難小屋が見える。

3番目の写真は、鮮やかな赤色の出荷時期を過ぎて黒く完熟した山形のサクランボ「紅ほまれ」。ジャムを作るには最高らしい。2020年6月27日撮影。

4番目の写真は、奥さんの佳子さんが2ヶ月ほど前に晴天を狙って刈田岳に登り、撮影した蔵王のシンボルである火口湖、お釜。2021年2月28日撮影。御主人の久義さんはその日、溶けかけたトトロの雪像の修復作業をしていたそうだ。



オーナー若き日の足跡 No.5 川崎泰照さんの face book より

【野口久義著『愛する緑の大地』（3）】

## 2、緑色の世界へのあこがれ〈1〉

ぼくは10才の頃から広大な緑色の牧場をいつも夢にえがいていた。さびしがりやだったのに、なぜ牧場や言葉の通じない動物たちが好きだったのかはわからなかった。遊戯場のある大勢の人間たちが行き交う騒音の街や緑色のない土地が大嫌いなことはたしかだった。ヤギやニワトリ、犬、それに多くの小鳥たちと共に過ごした日々・・・彼らが語りかけてくれるのを聞いた・・・ぼくのを聞いてくれることもあった。

中学生になるとぼくの夢はさらに大きくふくらんだ。学校を出たら北海道へ渡ってあの広大な荒れはてた根釧原野で多くの動物や植物に囲まれて生涯を送ろうということだった。深い神秘をこめた森、はてのない原野、緑色の美しい夏、そして厳しい長い冬、魅力だった。ぼくの住む所それは根釧原野しか考えられなかった。

やがてわが家の廻りもしだいに林がつぶされ、畑が消え草原がなくなり日増しに緑色が消えていった。そのため5年間も共にすごしたヤギとも別れなければならなくなってしまった。自転車の付けられたリンゴ箱に生後1ヶ月の子ヤギが入れられた。たがいに別離を悟ったのか、はげしく泣き叫ぶ母と子のドラマ。自分の子との別れ・・・かわいそうだった。なつかしかった5年間を振り返りながら、がらんとしたヤギ小屋の前でたたずんだ。餌がほしかったり、用事があったりすると大きな声で泣いた。そばを通りかかると上衣を引っ張ったり、乳をしぼって気にさわると乳の入っている容器に糞のついた足を突っ込んだり、オナラをして歯をむきだして笑ったり、頭を噛んだり・・・でも楽しかった思い出の数々・・・。

中学3年の夏、ぼくの所属する生物部は自然観察のために上越国境の谷川岳山麓を訪れた。動物や植物から山そのものにもあこがれをいただくようになった。しかし、山登りが好きになっても緑色の牧場へのあこがれは消えるどころか、なおいっそう深くなっていった。

その昔、牧場へのあこがれのきっかけとなったのは一枚の写真だった。アルプスの名峰マッターホルンを背にアルプで遊ぶ牛たちの姿だった。あの牛たちはなんて幸福そうなのだろう。ぼくもあんなすばらしい山の麓の緑色の美しい牧場で生活できたらどんなに幸福なことだろう、とずっと遠い世界のこととは知りながら、思っていたのだった。

雑踏の街中で、満員の通勤電車の中でいつもえがいていた。広い広い牧場を走っているぼくを・・・。

しかし、牧場での仕事は辛いことばかりだ。それは知っている。辛いからなお忘れることができないのだ。牧場は一年中緑色をしているわけではない。根釧原野ともなればなおのこと、一年のうち半分は雪の中だろう。しかし、長い冬が終わり太陽の光は次第にあたたかくなり、雪をとかしそこに黒い土を見せはじめる。そこにはじっと耐えしのんできた生命があってポツッ、ポツッ、ムク、ムクッとかわいい芽がではじめる。その年の寒さがきびしければきびしかったほど、やがて訪れる春に対するうれしさは大きい。大きいのは仕事だって同じだ。汗と土によごれ糞にまみれて力いっぱい働いたあとのよろこび充実感は大きいのだ。

牧場はぼくの心の故郷だった。そして緑色があるところ、そこはぼくの心のおちつける場所だった。街を歩いていてふと小さな公園を見つける。そこには樹木があった。白いベンチもあった。ぼくの足は急いでいても、目から脳へそして急いでいるはずの足はその白いベンチへと向かってしまう。そして木もれ日をあびながら、虫の食ったプラタナスの葉っぱをただみつめる。そのうしろには子供たちが遊んでいる。砂場やブランコが子供の天国なのだ。そばにいる母親はよごすまい、よごすまいと気を使っている。自分のことしか考えていないからだ。よごれたっていいじゃないか。洗濯なんて毎日してもいいじゃないか。子供はのびのびと自由に育ててあげなかりゃ。街の子供は田舎の子供たちにくらべてかわいそうだ。故郷のない子供たち、そして故郷のないぼく。

ぼくはよどんだ空気のうしろに見えるぼんやりとした山並みを眺めて思った。あの山の空気はひんやりとしてすきとおっているんだと。街の中を流れる川の水は黒くて炭酸ガスがブクブクしていても、上流のあの山のふところを流れる川の水は冷たくておいしいんだと。排気ガスで真夏だというのに黄ばんでしまった街路樹の葉っぱだけど、あの山のはういういしい緑色を見せて短い夏を力いっぱいうたっているんだと・・・。

森、草原、原野・・・それらには緑があった。そして、そこにはかわいらしい動物たちが自由に遊んでいた。風も雲も太陽も自由に明るかった。そこはやっぱり僕の心の故郷だった。

ところが、ある日突然に十数年も夢にえがいていた牧場がぼくの前に現れたのだ。それも北海道ではない。ぼくが初めにあこがれていたスイスの牧場だった。マッターホルンの麓の牧場では

なかったけれど、同じスイスの牧場だった。ぼくの心のときめき、とても押さえきれぬものではなかった。

【野口さんの夢に描いていた牧場が目の前に現れるまで】

野口さんと僕とは共通体験がある。野口さんは1966年頃変貌し緑がなくなってゆく東京に暮らしながら、緑の世界すなわち山にあこがれた。

僕は1976年に初めて東京に住むようになって大都会の恐ろしさを知った。現在と違い1970年代の仙台には路面電車がゆっくりと走っており、緑も今よりずっと多かった。東京でまず住む所を探したのだが、勤め先が錦糸町だったので総武線沿線の下宿を探した。新小岩・小岩は緑が全くというほどなく、江戸川を渡り市川市に入ると突然緑が増えた。緑が多いという理由から、結局本八幡駅近く、「藪知らず」（石で囲まれていて入口出口がなく、入ると永久に出て来れなくなる、という言い伝えのある名所）のすぐ近くに住む事にした。通勤しはじめてわかった事は、足が浮く程の超満員電車に乗り続けると頭がおかしくなる、おかしくならぬためには山に行くしかない、という事だった。そこで、地元の市川山岳会に入ったのだった。

写真は、「野口ペンション」のフェースブックから、2021年5月6日の飯豊山麓、白川ダムの水没林。息をのむような風景だ。





【野口久義著『愛する緑の大地』（4）】

2、 緑色の世界へのあこがれ〈2〉

東京に例年のない雪のたくさん積もった昭和43年2月、ぼくの山仲間南川和勇さんと二人横浜を離れ（川崎注：貨客船バイカル号）ヨーロッパへと旅立った。目的は山登りだった。三月下旬、フランスアルプスにあるブレチエール西壁《西壁のジョー・ブラウンルートの冬期第二登で、当時のアルプスには、岩場のグレードがもっとも困難な“6級の上”のあるコースはグランドジョラス北壁のカシンクラックとこの西壁のブラウンクラックの2つだけだった。ぼくたちはこのコースに6日間を費やして登った。この記録はアルピニズム誌（世界の山の記録ののる本で西ドイツのトニー・ヒーベラーが編集）にものった。》を登り、山からおりてくると、ぼくたちの泊まっていたシャモニーのペンションには同じ船で横浜をたった山仲間の芳野さん、福田君、手島君がきていたのだ。芳野さんは来月初旬には日本へ帰ることになっている。しかし、福田君と手島君はぼくらと一緒に夏の山登りのシーズンまでの間アルバイトをする約束をしていたのだった。

下山した翌日、まだその興奮もさめやらないうちに、ぼくらは芳野さんをウィーンまで送って行くことになった。三人が買ってきた車、タウナスに乗ってぼくらはまずジュネーブへ行った。

レマン湖がローヌ川と名を変えるところにジュネーブの中心でもあるモンブラン橋がある。この近くには花時計や国家記念碑のあるイギリス公園、世界一を誇る大噴水などがある。このモンブラン橋の南側をローヌ通りといい、この一画にローヌ時計店がある。この店はジュネーブにはたくさんある時計店と違っているところがひとつあった。店頭「日本語で承ります」と書いてあるからだ。この店には山川さんという女性が勤めていて、芳野さんはこの方にぼくらの就職のことをお願いしてくれたのだった。

共同通信の下田さんにあいさつをしたあと、ぼくら5人はウィーンへの旅にでた。運転手は4人いる。ぼくは運転ができないので常に助手をやる。とても楽しい思い出となった。

チーズで有名なエンメンの谷では、キャンプしているとパトカーがサイレンを鳴らしてやってきた。何かと思ったら、雪も降っているし寒いからかぜをひくなというのだった。平和なんだな、と思った。

ミュンヘンでは朝から晩までビールを飲みっぱなしだった。すっかり酔ってテントにくるまって寝ていると、朝の散歩にきた犬をつれたおばさんがぼくの背中を蹴って通りすぎた。ミュンヘンは街とはいえ緑の多いこんな公園がずいぶんあった。ただ、街の中心はミュンヘンオリンピックのための工事でざわついていた。

ウィーンでは駅前の公園で寝たが、翌朝おまわりさんに起こされた。またかぜをひくなというのかと思ったが、罰金だった。しかし、領収書までちゃんと書いてくれたのには感心してしまった。

ウィーンで芳野さんと別れたあと、ぼくらは往路をジュネーブへ向かった。行きと同じようにハプニングはあった。ぼくの大好きなサウンドオブミュージックの舞台になったザルツブルク、ここでは女性用のトイレに入ってしまう中にいた女学生グループに笑われてしまった。夜になると郊外の大地の上で眠った。

リヒテンシュタインは美しい国だった。そう、アルプスの少女ハイジの故郷だ。ゆるやかな起伏のアルプスがどこまでも続いていた。早春のためか、黄緑色がとてもきれいだった。その緑に合

う赤い屋根の家々が点々として、ぼくはもう気が遠くなりそうだった。働く所がもしみつかったら、ぜひこんな所で……。ぼくはひそかに祈った。ぼくらはジュネーブを出発してから六日目にジュネーブへ戻ってきた。

### 【ウィーン往復旅行】

来月初旬に日本へ帰る芳野満彦さんをウィーンへ送るために、5人でフランス～スイス～ドイツ～オーストリアまで車で走り、公園でキャンプする貧乏旅行。辛い仕事の前の楽しい数日間。

エンメン谷とはベルン東のエンメンタル (Emmental, tal は谷)。穴あきチーズの本場だ。

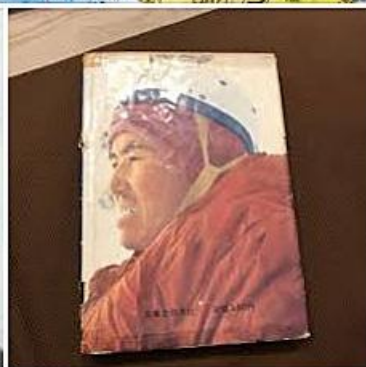
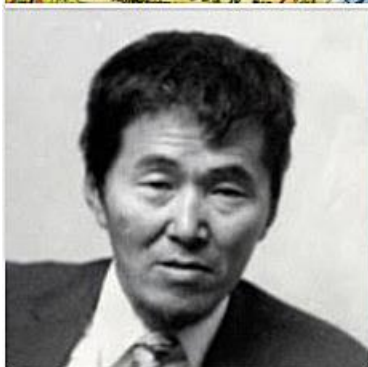
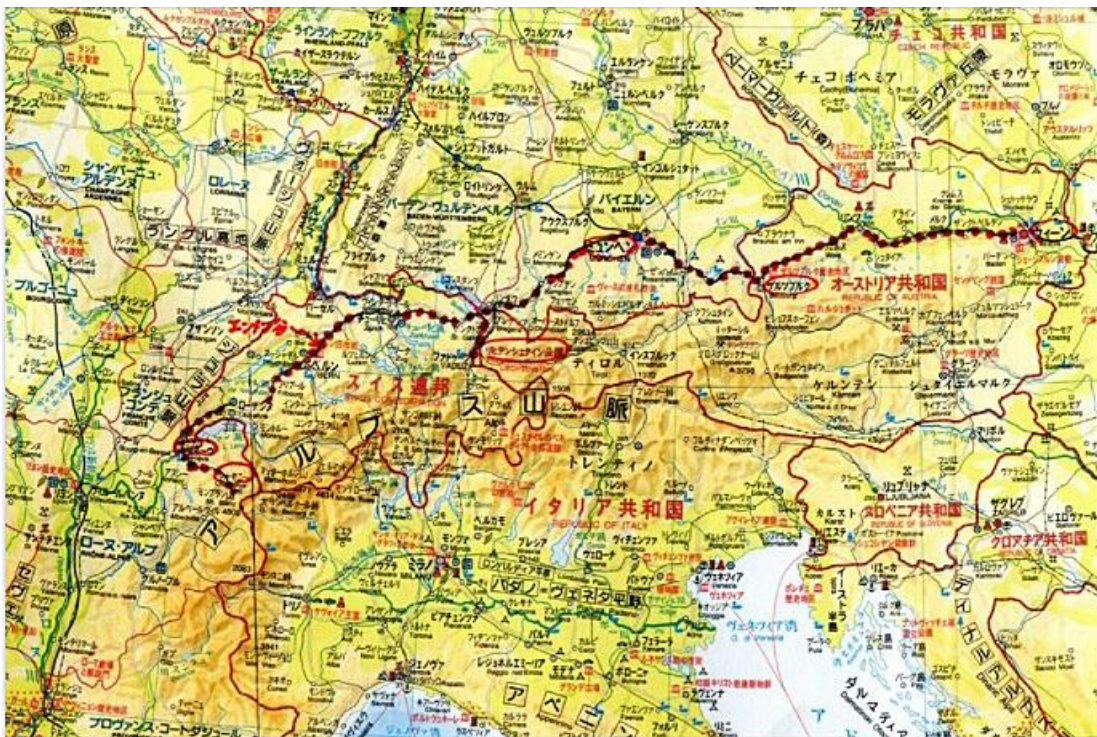
最初の地図は、彼らの走破したルートを示す (赤点線)。「新詳高等地図」(2002) 帝国書院刊 (息子にもらった) に川崎加筆。

2番目の写真は、3人の就職をお願いしてくれた芳野満彦さん。インターネット画像。

3番目の写真は、冬山装備の芳野満彦さん。日本人として1965年に初めてマッターホルン北壁を登った時の写真だろうか。インターネット画像。

4番目の図は、文章にも出てくるもう一つの“6級の上”のピッチがあるグランドジョラス北壁のルート図。カシンクラックに赤下線。前年の1967年に伊藤・石井・伊佐パーティーが登った時のもの。「山岳第62年」(1967) 日本山岳会の図に川崎加筆。

因みに、左側のレピュファ クラックも “6級の上” だったそうだ!





【野口久義著『愛する緑の大地』（5）】

2、緑色の世界へのあこがれ〈3〉

今日は面接試験の日だ。山川さんとの約束の時間までの数時間を喫茶店へ行ったり、本屋へ行ったりする。モンブラン橋を渡るのに、おぶりっこをしながら渡った。じゃんけんで敗けてばかりいたぼくは、一度しか楽できなかった。行き交う人々が振り返って笑っていた。

ぼくは2月の末にジュネーブに着いた時からこの街が気に入っていた。遠い日本から海を越え大陸を横断してやってきたヨーロッパに話すことのできる人がいたからだ。共同通信社の下田さんのご家族だった。友人の紹介ということもあって見ず知らずのぼくらを心よく歓迎してくれた上に、面倒な保険のことも引き受けてくれた。ぼくらは冬のアルプスの難しいコース（川崎注：ブレッチエール西壁）をめざしてやってきた。登れる確信は十分にあったが、もし事故につながった場合のことを考えてお願いしたのだった。

下田さんは、「遭難の事など気にするな。天候には十分注意し、栄養のあるものをたくさん食べて、あとは君たちが目標に向かって全力をあげればきっと登れるから。」と励ましてくれた。

初めての異国の地で、ぼくらにはなんと心強かったことかしのれない。それにシャモニーへ向かう朝、きのうまでの冷たい雨もあがり朝靄につつまれた静かな朝を迎えた湖に一羽二羽・・・と白鳥が遊んでいた。朝靄を通して差し込む冬の陽は弱く、水面にほのかに光って揺れている。なんと平和な光景なのだろうか。国際都市ではあるけれど、人間味の感じられる街だった。極寒の冬のアルプスの岩壁に向かおうとするぼくらに、どれだけ安らぎと元気づけてくれた事かしのれない。

モンブラン橋の袂で山川さんと逢って二台の車は郊外の夕暮れの中の道を走った。やがて私道に入り広い庭で車は止まった。ぼくらは案内されるままに食堂を抜けて応接間に入った。ここの主人夫妻と向かい合ってすわる。通訳の山川さんをはさんでいよいよ面接試験が始まった。いや、そんなオーバーなものじゃない。主人（ヘルナン）の方からこんな内容ですが、よかったですか、というようなものだった。

ぼくらは賃金などはどうでもよかった。夏の登山シーズンまでの間、約2ヶ月あまりを食べられるだけでよかったから即OKだった。それに4人一緒に働けるのもうれしかった。仕事はサレープ山の放牧場で木を切るとのこと、月250スイスフラン（1スイスフランは約83円）だった。仕事の内容も泊まることのできる山荘のことも、もちろん一家のこともわからない。不安だ。しかし、山川さんはぼくらがどんな人間であるかを知らない。これからぼくらを雇う主人よりももっと辛い立場にいるのが山川さんなのだ。何か面倒な事態になったら、それこそ山川さんの立場はなくなってしまう。それにこの就職の力になってくれたローヌ時計店の社長夫妻も同じだ。ぼくらが就職のことを深刻に考えていたのを知って働きかけてくれた芳野さん、そしてぼくらを弟たちでもあるかのように考えてくれた山川さん、ローヌ時計店の社長夫妻に対して感謝の気持ちでいっぱいだった。だから金銭的にはなく、あたたかみのある人たちに囲まれて決まった仕事に心の底から飛び込んでいけるのだった。

その夜、就職祝いにと飲んだワインがほろよくきいて、酔った身体にレマン湖からの風がこちよくあたたかかった。生きるってなんてすばらしいのだろう。あしたから始まる放牧場での生活を思いうかべながらそう思った。

ヨーロッパへきてほんとうによかった。とても長かったあこがれの実現だった。10才のときのあこがれが、いつになってもいい、生きていうちに必ずあの写真の本物をこの目で見るんだ、と幼少の小さな胸に秘めてきたのだ。ずっと遠い世界のことだった。ヤギを世話して、もらえる月200円の報酬も積んだのだった。しかし、それが可能性のあった根釧原野ではなく、可能性のないヨーロッパにきてしまったのだ。夢を追い続けてきてほんとうによかった。

あしたからの放牧場の中での生活を思うとなかなか寝つかれない夜だった。

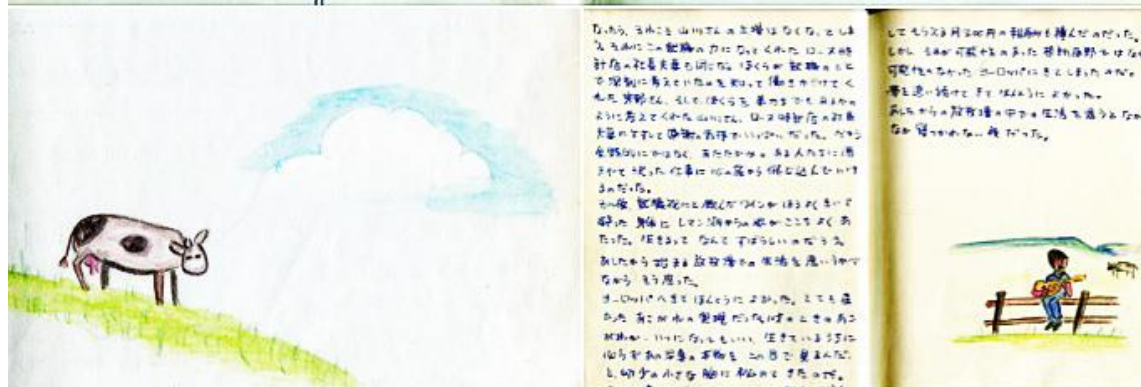
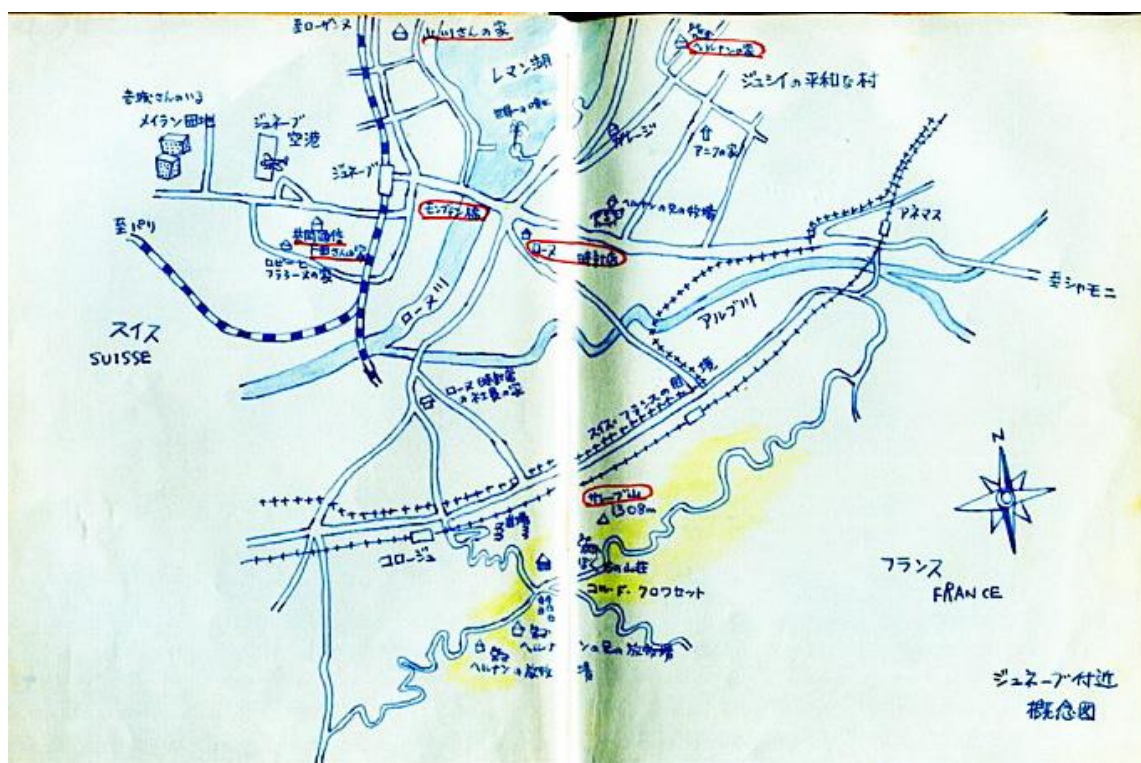
【とても長かった夢の実現】

22歳の野口さんのみずみずしい感激いっぱいの仕事前夜。

最初の地図は、この本の冒頭に付けられた野口さん手書きの地図。赤線、赤丸は文章に出てくる地名。川崎が加筆。必要にして十分な情報が入った素敵な地図だ。これだけを見ても野口さんの並々ならぬ才能を感じる。

2番目の写真は、この章（2、緑の世界へのあこがれ）の扉。気持ちよさそうな入道雲とくつろぐ乳牛がイラストになっている。

3番目の写真はこの章の最終ページ。右下には遠くサレーブ山と近くに牛、柵に腰かけてギターをつまびく野口さんのイラスト。





【野口久義著『愛する緑の大地』（6）】

### 3、四月のたより〈1〉

4月9日（火）

山川さんの家で一夜を過ごしたぼくらは、まずローヌ時計店の社長夫妻にお礼をいいに行った。人から人へ伝えられていった信頼の絆・・・ぼくらは受けつぎ大切にしていかなければならない。

午後になって愛車タウンাসに乗って郊外へ向かった。ジュシイの交差を左に折れてプラデボン家の母屋へ通じている緑の並木道を抜けて大きなトチの木のある広い庭に車を止めた。

プラデボン夫妻はぼくらにコーヒーをすすめると待っているようにと言った。そして何やら準備を始めた。車にいろいろ積んでいるところを見ると、このでっかい家に住むのではないらしい。とにかくここの家族を紹介しておくことにしよう。

主人はヘルナンといい、38才。いつもここにこして感じがよい。奥さんはエリザベスといい、若々しく美人である。二人の間にジャンピエール 12才とオリビエ 10才の二人の子供がいる。あとはたくさんの動物、牛や馬、犬にニワトリなどである。

用意ができて出発である。夫妻の車は新品のシムカ。猛然と飛ばし始めた。それも奥さんの運転だ。ぼくらとはあっという間に離れてしまった。でも、すぐ気づいてスピードを落としてくれた。このあたりは、郊外ではスピード制限などないのである。

車はシャモニー街道（ジュネーブからシャモニーへ続いている道路）を横切り、サレーブ山の方へ向かい、やがてスイス・フランス国境の小さな村コロージュで止まった。プロパンガスや食料品を買い込んでいるので、これは山の中に住むのかな、と思っていると、ヘルナンに運転を交代すると車はサレーブ山へ続いているヘアピンをぐんぐん登りはじめたのである。そしてついにサレーブの稜線上にとびだしてしまった。

ここはサレーブの稜線上にある小さなコルで何軒かの家がある他、傾斜する少しの畑と広大な草原になっていた。ヘルナンはそこから近い草原の中の一軒のこじんまりとした山荘にぼくらを案内してくれた。東側には針葉樹がきれいにならんでいる。窓をあけると早春の陽が斜めに差し込みみんなの顔を赤く染めた。

山荘内を案内したあとヘルナンは裏の小道を下り始めた。林を抜けると牛舎があり、その近くにも小さな山荘があった。傾斜する放牧地は枯草色で、まだ随分と雪が残っているところがあった。ここの広い放牧地に大小さまざまな野バラがあり、これを根こそぎ引っこ抜くのがぼくらの仕事だった。ヘルナンや他の3人は大きな鍬を振って根っ子をほじくりかえしていたが、ぼくは仕事の事よりまわりの景色にすっかり見とれていた。少年のころあこがれていたのと同じだ。針葉樹の森はあった。はてしない放牧地が続き、小さな流れもあった。遠くには残雪の山々があった。ぼくの胸はときめきワクワクとしている。

山荘に戻ると、奥さんはまっ白のシーツを四つのベッドに敷いておいてくれた。そして、水道やガスの使い方を教えると、夫妻は帰っていった。ここはヘルナンの別荘なのだ。ヘルナンの家族が4人、ぼくらが4人であることが好都合だった。けんかになるといけないので、ジャンケンで部屋を決めることにする。そして、南側に向いた明るい夫妻の部屋を南川さんと手島君、中央のキッチンを過ぎて北側の子供たちの部屋を福田君とぼくということになった。誰でも明るい方がいいので1ヶ月たったら交替することに決めたが、居心地がよく結局そのままだった。

夕食はガス灯の下で楽しく済ませた。

うれしいことがある。奥さんの使っているギターがあるからだ。夕食後、さっそく大好きな曲をいくつかうたった。

ぼくらの部屋の西側の窓からは、ジュネーブの街のあかりと星のひかりとが対照的に光っているのが見える。

ぼくらは誰もがそわそわして少しも落ちつかず、あっちへ行ったりこっちへきたりしている。うれしくてしかたがないのだ。だって牧場主になったような気がするんだもの。

ふっくらした羽根ぶとんにくるまって、サレーブでの最初の夜は静かに更けていった。

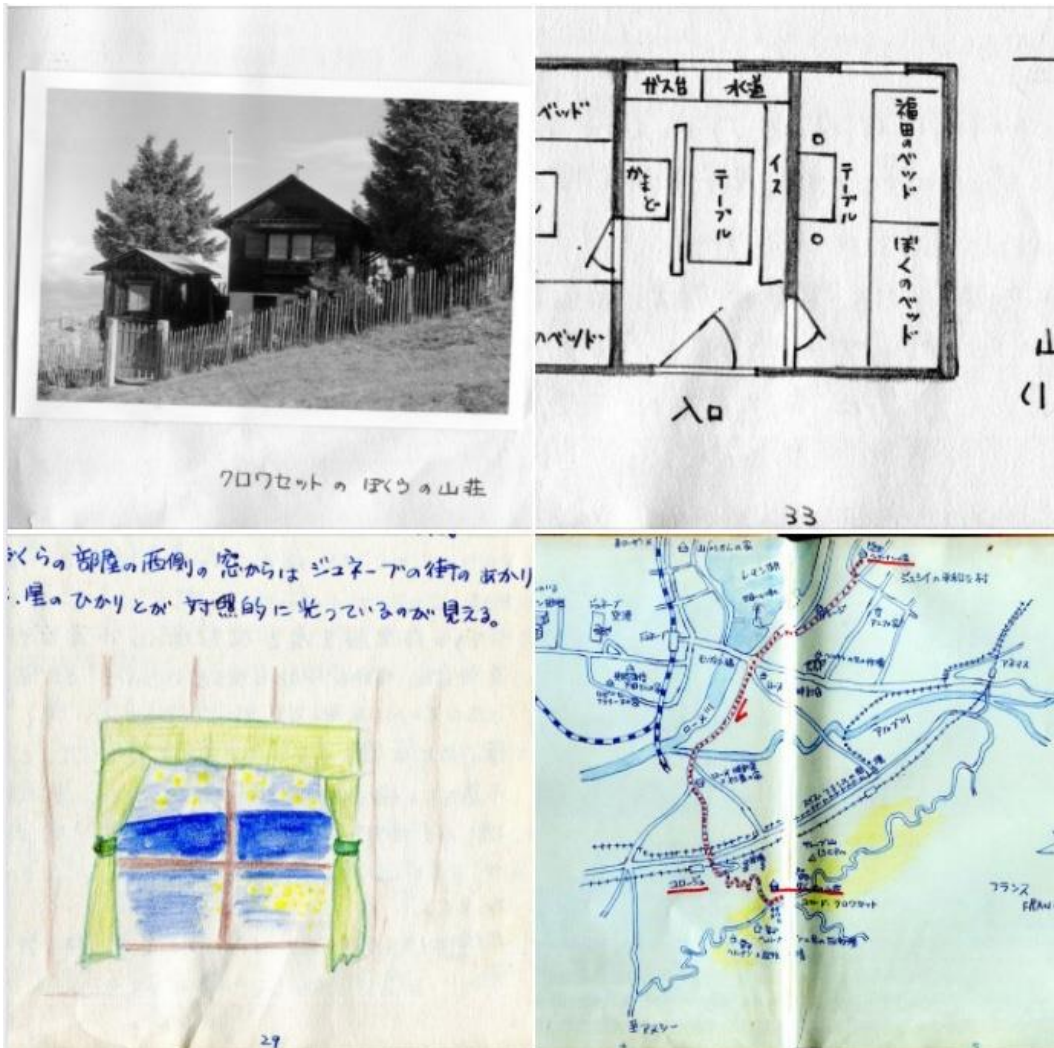
### 【山の牧場と山荘での夢の新生活】

一読者である僕も胸躍るような一日！

最初の写真は、南側から見た4人が住んだ山荘。2階の南川さん、手島さんの部屋の窓が見える。写真右側には針葉樹の林がきれいに並んでいる。動物たちに荒らされないよう、しっかりとした柵が作られている。

2番目の写真は、山荘2階の間取り。丁寧な労作だ。

3番目の写真は、窓からの夜景。ジュラ山脈の上には星空、手前にはジュネーブの街のあかり。因みにジュラ山脈は、世界各地で恐竜化石が発見されている時代ジュラ紀（1億数千万年前頃）の地層が最初に研究された所だ。4番目の地図には4月9日のルートを赤点線で示す。





【愛する緑の大地（7）】

3、四月のたより〈2〉

4月10日（水）

福田君に起こされた。7時30分だ。テーブルにはミルク、コーヒー、パン、バター、ジャムが並んでいる。8時、ジュネーブのスーパーで買っておいた上下つなぎの作業服を着て、放牧場への小道を歩いて行った。4月も中旬になるというのに、ここ海拔1,000mを超えるサレーブではまだ寒く、枯草の上には雪とまちがえるような霜がおりている。小鳥たちの歌声も寒そうで元気がない。重い鋤を振るうのは大変な仕事だ。一時間後にはもうマメができてしまった。おまけに足が冷たくて泣きたくてくる。

昼食はぼくらが作るのだ。食べるより作る方が楽しい。食後は山荘の庭に長イスをひっぱりだして、あたたかい陽をあびて休息する。ギターを弾きながら……。昼休みは2時間とぼくらの“緑の王国”は決めてある。ヘルナンが決めたのではなく、ぼくらが決めたのだ。午後は5時までだ。

午後は暑いくらいになってくる。午前中はまったく陽が当たらず、午後は西日がいっぱいなのだ。

休息も合い間にかわいらしく萌えでたばかりのタンポポやノビルを摘んだ。きっと夕食のテーブルに色どりを添えてくれるに違いない。抜いたバラの山がいくつもできる頃、ヘルナンとジャンピエールとオリビエが卵や手作りのジャムを持ってきてくれた。そして広い放牧場内を案内してくれた。当分の間仕事はなくならないだろう。それにしても、スイスに住んでいてフランス領にこんな広大な土地を持っているなんて、なんてかっこいいんだらうと思う。

夕方、手島君と二人でコロージュまで食料を買いに下った。肉30フランをはじめ全部で50フランも買った。夕食は豪華だった。しかし、よく考えたらこのままでは赤字になってしまうことになり、今後は肉など買わずソーセージにすることを決めた。

まる一昼夜が過ぎたのにまだ落ち着かず、夜遅くまでさわいだ。

4月11日（木）

ぼくらが仕事をしている所に見知らぬ二人が近づいてくる。ぼくは離れた所にいる三人に聞こえるように言った。

「おおい、へんな外人がくるぞお。」

ところが、そのへんな外人はぼくらの前にくると言った。

「ミナサン、コンニチワ。」

おどろくことに日本に13年も住んでいたのだから。さらにおどろくことに、一人は日本女性と近々結婚するそうだ。さらにおどろくことに、その女性はぼくらと同じ日2月17日に同じバイカル号で日本を離れた人で、ぼくも話したことがあったのだ。世界は狭いのだ、と思った。

ぼくらの車はクロワセットに止めてある。車体にはいたずら書きがたくさんしてある。また、ぼくらの山荘の北側に国旗掲揚台があって、上からフランスと日本の国旗がはためいている。彼らはこれらを見て、なつかしく日本を思い出してぼくらの所へやってきたのだ。

二人が帰ると入れ替わるように、ヘルナンを先頭に見たことのない人が三人やってきた。みんなで食堂に入り、ワインを飲みながら話が始まった。英語もフランス語もわからないぼくはまるでチンプンカンプンだった。手島君が活躍している。顔が明るいなと思っていたら、明日の謝肉

祭から四日間休日になるということだった。ぼくらがシャモニーへ行くというと、ヘルナンたちはにぎやかに笑いながら帰っていった。

シャモニーへ行くといったものの、山に登るほどの心の整理はできていなかった。心配だった就職が決まってやっと落ち着いたばかりなのだから。

夜遅くまでフランス語の勉強をする。

### 【山荘の2日目と3日目】

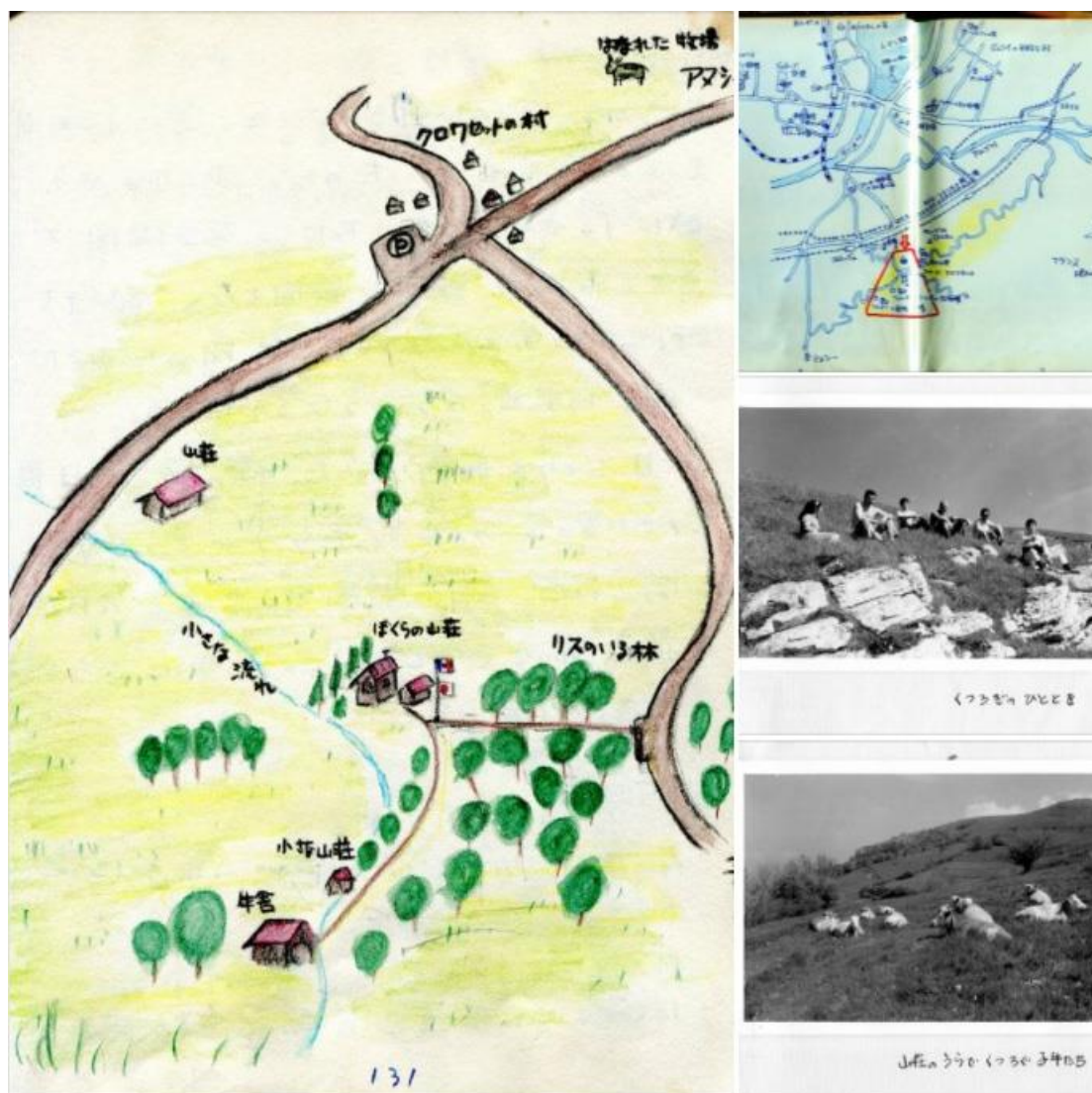
辛い仕事と楽しい生活、フランス語の勉強。

最初の図は、山荘付近を北から見た鳥観図。山荘脇にフランスと日本の国旗が揚げられている。へんな外人は、クロワセットの村の駐車場の車に書かれた日本語を見た後、遠くに日本の国旗が揚げられているのを見つけてやって来たのだろう。

2番目の図は、最初の鳥観図の範囲をジュネーブ付近の手書き地図に示す。

3番目の写真は、「くつろぎのひととき」。牧場に点在する露頭には層理面が見える。白っぽいので、石灰岩なのだろうか。

4番目の写真は、「山荘のうらでくつろぐ子牛たち」。高低差のある広々とした牧場だ。





【野口久義著『愛する緑の大地』（8）】

3、四月のたより〈3〉

4月12日（金）

南川さんと手島君はシャモニーに置いてあるたくさんの荷物を取りに行くとでかけて行った。福田君とぼくは手紙を書いたりフランス語の勉強をやったりする。

真夜中、まんまるの月がでている。とてもしずかなサレーブの夜だった。

4月13日（土）

あいかわらず、机に向かってフランス語の勉強。教科書はコロージュで買ってきた幼児用の絵本だ。それでも難しい。

机に向かったままでは身体がなまってしまうので、午後はゆるやかなサレーブの稜線を散歩する。頂上一帯は広々として、馬に乗った若者が元気にとびまわっている。

岩登りのグレンデも近くにあった。はるか下のジュネーブの街が、ぼくらが遠い世界にいることを教えているようだ。北西にはジュラ山脈、南にはモンブランをはじめとしたアルプス山脈が見える。なんと素敵なのだろう。

夕方になって、小雨の降る中を山川さんがお母さんと一緒に尋ねてきてくれた。日本食が恋しいでしょうと、味噌や醤油、ようかんなどのたくさんのおみやげを持って。しかも、それだけじゃない。就職を世話してくれたお礼に、ぼくらが庭の手入れをしてあげたい、とローヌ時計店の社長に先回りして言ってくれたのだ。

また、このところスイス・フランスで日本人観光客の評判が悪いことも聞いた。山川さんのためにも、ローヌ時計店の社長のためにも、スイスのまた日本のためにも、しっかりしなければいけない、と思った。

山川さんは夕暮れの中を帰って行った。

福田君とぼくは山川さんの律儀ある人間性について論じあい、そして深く心を打たれたのだ。

4月14日（日）

明け方3時まで、そして朝食後も昼食後もフランス語の勉強をする。これはぼくに熱意があるのではなく、福田君に動かされたところが多かった。

午後シャモニーへ行った二人が風邪をつれて帰ってきた。

肌寒く、空のどんよりして暗い一日だった。

4月15日（月）

買い物のためにコロージュまで下ったが、休日のためどの店も閉まっていた。徹底していて気持ちがよいほどだ。今日はありあわせで済ませよう。

4月16日（火）

連休ぼけとむし暑さの中での仕事。手島君は歯痛のため休日。

4月17日（水）

夕方になってジュネーブへ行った。買い物をしたあと吉城さん宅を訪れる。吉城さんは若さ溢れる物理学者であり、アルピニストでもある。ついこの間美しいスエーデンの女性と結婚したばかりだ。酒を飲みながら、山の話や仕事の話、しまいには原子爆弾の作り方まで話がはずんだ。

日本の物理学会は非常に遅れているとも寂しげに言っていた。吉城さんも芳野さんの友人、やはり近くにこうして話のできる人がいると、とてもうれしい。

深夜のレマン湖に無数のネオンがゆれている。まるでおとぎの国の湖のようだ。そんな幻想的な湖にかかるモンブラン橋を渡って黒いシルエットになっているサレーブに向かうぼくらはおとぎの国の主人公たちだ。

#### 【4日間の謝肉祭休暇】

敬愛する山川さんの事、ジュネーブに住む吉城さんの事。

吉城さんについては、野口久義さんの著書「坊平ペンションだより」に次のような記載がある。

「吉城さんは長いヨーロッパ生活の体験から、ヨーロッパの人たちと日本人との大きな違いをよく話していた。何事にもおおらかでのびのびしているヨーロッパの人たちに比べて、日本人はいつもこせこせして視野が狭いというような話だった。それは、たしかにそうだった。七ヶ月しかいなかったぼくだってなんとなくそれを感じたのだから・・・。」

最初の絵は、吉城さん宅で話し込んで帰る途中のモンブラン橋の夜景とサレーブ山の挿絵。

2番目の写真は、モンブラン橋の夜景。橋の向こうに世界最大の噴水。インターネット映像。

3番目の絵は、休暇初日の夜に山荘から見る満月の挿絵。





【野口久義著『愛する緑の大地』（9）】

3、四月のたより〈4〉

4月18日（木）

小鳥やリスたちと共に一日の仕事が始まる。まだ雪の消えきらないジュラの山並みを前にして実にいい気分だ。眼下には緑の平野が広がり、赤や青や白の屋根が点々として、そのコントラストが美しい。

黄や白や紫の小さな花が、緑色の牧草が、太陽の訪れとともに七色に輝きはじめる。一週間前はまだ冬のような感じだったのに、かけ足で春がやってくる。北斜面の雪も目に見えて消えて、緑がいっそう増す初春のサレーブ。

仕事をしている所へ、ヘルナン、奥さん、ジャンピエールがやってきた。今日はクロワセットから南西に4キロメートルほど行った所にある放牧場での仕事だった。クロワセットだけではなく、ここにもこんなに広い土地がある。とても羨ましい。

ここに牧場小屋があってここの掃除とペンキ塗りをやった。

昼食はテラスにテーブルを出して、みんなでやった。

奥さんが遠くに見えるモンブランを指さして言った。「あれはナポレオンがねているのよ！」ここから見るモンブランは、氷の島のように春霞の上に浮かんでいた。

今日は仕事が辛かったのかとても疲れた。ヘルナンと一緒にいたため緊張しすぎていたようだ。

4月19日（金）

昨日と同様に離れた放牧場での仕事だ。

再びペンキ塗り、干し草運び、水呑場作りなど、と使用人のフリッツと一緒に働いた。ヘルナンだとワインを飲むの休憩があるが、フリッツだと休憩がないのである。ぼくらが休んでいるとフリッツはぼくらの仕事を始めてしまうのだ。だから、どうしても休んでいられなくなる。ぼくらの倍に近い身体でフリッツと一緒にだからたまらない。けれど、ぼくらは歯をくいしばってがんばった。スイス人に負けたくはなかった。

昼になったので山荘に帰ろうとすると、ヘルナンとオリビエが昼食を持ってきてくれた。今日もまたみんなでの昼食になった。

昼休みは80 kmも離れた所にあるモンブラン山群の見える花のいっぱい咲く草原に寝て、いろいろなことを考えた。

ぼくが初めてこのサレーブに来た10日前に考えたことは、10数年の夢が実現できたということとても喜ばしいことだった。

しかし、今はこう考えている。

こんなにも美しい大地で、動物や植物、風や雲などの気ままな彷徨者たちと共に、都会でのすべての憎悪を忘れて生活できるとしたら……。二か月ではなく生涯ずっとだ。ぼくの求めているユートピアは、立派な屋敷に広い庭があって多くの召使いの中でのうのうと暮らすのではなく、大自然の中に汗と土にまみれているぼくがいる所なのだ。だから、今のぼくはユートピアにいるんだ。自然の爽快な抱擁にまどろんでいるのだ。

ここには激昂した世界情勢も届くことはないだろうし……。ただ華やかさだけにあこがれてしまって自分を犠牲にしている人や、人を警戒しすぎている人や虚栄ばかり働く人たちには耐え

ていけない大地なのだ。夢や理想はあっても、考えているだけで努力もしないで平凡な日々を過ごしている人たちが到底生活できない大地なのだ。大自然は純粹なきびしさを与えてくれるし、大自然の中で生きてゆく人たちとは心が通じあう。

ああ、自然よ

あてのない彷徨者たちよ

ぼくはこのままずっとここにいたい

ぼくをこのままずっとおいといておくれ！

遠くで福田君が呼んでいる。午後の仕事が始まったのだ。だが、もう仕事はいくらもなく、皆でワインを飲みながら雑談して終わった。

夕食前のひととき、フランス・スイス国境の黒いシルエットのジュラ山脈に太陽が沈んだ。太陽は沈んでも、明日のためにエネルギーを補い、それからフランス語の勉強も怠らない。今日一日を振り返って、そして明日を夢見る・・・それが日課・・・。

【この美しい大地で生涯ずっと・・・】

野口さんは、この頃から既に自分の人生設計の骨組みを心の中に描いていた。

最初の写真は、ヘルナンの離れた所の牧場。残雪はもうほとんどない。木は疎らで典型的なアルプだ。

2番目の絵は、ジュラ山脈に沈む夕日を描いた挿絵。手前には薄暮の牧場。

3番目の写真は、ジュネーブから望むモンブラン山群。インターネット映像。





【野口久義著『愛する緑の大地』（10）】

3、四月のたより〈5〉

4月20日（土）

日本での休日であれば毎週のように山にでかけるのに、いつも山の中にいるせいか仕事が辛いのか、サレーブの岩山は近くにあるというのに2日も休日があるのに、どこへも行こうともせず、草原にねころびギターをつまびき、太陽を浴びてポカンとしている。これがほんとうの休日なのだろうか。

4月21日（日）

今日はローヌ時計店の社長宅に庭の手入れをしに行く日だ。社長宅はコロージュからジュネーブに行く途中にあってここにはめずらしくアメリカ的な白い建物だった。芝生の広い庭がきれいだった。広いといってもぼくらの山荘の庭はこの数百倍だ。

仕事といってもぼくらの得意なガレージの掃除やペンキ塗りで昼までには終わってしまった。昼食は芝生の庭でバーベキューだった。それは豪華なもので、お礼どころかかえって御馳走になりきたようだった。

一日とても暑かった。山川さんは7月中旬の陽気だといっていた。

4月22日（月）

朝からとても暑くて、こんな中で鍬を振るうのは苦痛だ。木陰を求めながら仕事をする。

午後はさらに暑さが増した。冬眠中のヘビが躍り出しぼくらに向かってきた。身体は小さいのに牙だけが大きいヘビだった。捕らえてタバコを口の中に入れたら、あっという間に死んでしまった。木にぶらさげて置いたら、驚のような鳥が持ち去っていった。

それだけではない。ひとつの根を掘り返したら大蟻の大群が飛びだしてきた。

次々と事件は発生した。福田君とぼくがいつものようにふざけ合っていてぼくが草の上に倒れたら、その瞬間飛び上がりたくなるような痛みを感じたのだ。腕にジンマシンのようなものができ、赤く腫れてしまっている。倒れた所にあったトゲのある草が原因なのだった。寒気がし痛みがあり、急いで山荘へ帰り薬を塗り冷やした。

この異常な暑さには結局みんなが苦しんだ。四人共下痢をして、その原因は朝食のミルクだった。

4月23日（火）

今日も暑かったが心をひきしめてやろうと、扉を開けようとしたとき、窓外を見ていた手島君が声を殺して言う。

「おおい、俺たちが働いているのがバレたらしいぞ！」

ぼくらは南側の窓の方へ寄った。ぼくらの車を止めてあるクロワセットに、おまわりさんが5～6人うろうろし、ぼくらの車に書きたいはずら書きを見ている。

「裏の掲揚台の日の丸の旗、下ろしておけばよかったな。」

「あーあ、つかまったら国外追放だぜ。」

「いや、強制送還だよ。」

みんな口々に言った。ぼくらは観光のパスポートで来ているから、働くことは国で禁止されている。ジュネーブの時計店でアルバイトをしていた女の子がつい最近国外追放になったと、山川さんから聞いたばかりだ。みんなまったく落ち着かない。望遠鏡まで持ち出して、おまわりさん

の動作を監視している。やがて、この山荘はフランスとスイスの兵隊に攻撃されて、国外追放どころか死を免れないのじゃないかと思っていた時、おまわりさんは道路にテープを張ったのだ。どうもぼくには関係なさそうだ。何かゴールのようだ。何だろう？と思いつつ、まあ殺されそうもない気配なので仕事にでかけることにした。

ところが、まもなくエンジンの音も高らかにコロージュからのヘアピンを車が勢いよく突っ走ってきたのだ。

後でヘルナンに聞いたのだが、これは有名なジュラ・ラリーでオランダからジュラ山脈を越えて2,000km、このクロワセットがゴールなのだった。静寂を破って走ってくる中にはわが日本の誇るホンダもあって、歓声を上げた。

夕方、買い物のために南川さん手島君がコロージュへ下った。さっきのラリーの豪快さが頭に焼き付いていたのだろう。タウンスが勢いよく走り抜けていった。

夜になって雲が多くなって星が見えなかった。そんな暗い夜空を見上げながら “思い出の渚” をギターに合わせて歌った。この歌は海に消えた恋人を歌ったものだが、この曲のヒットしている頃、愛する山の友を亡くし、母を亡くしたぼくは寂しい時によく歌った。この歌を通じて二人がぼくを励ましてくれるのだ。

・・・波に向かって叫んでみても

もう帰らないあの夏の日・・・

#### 【野口さんの美的センス】

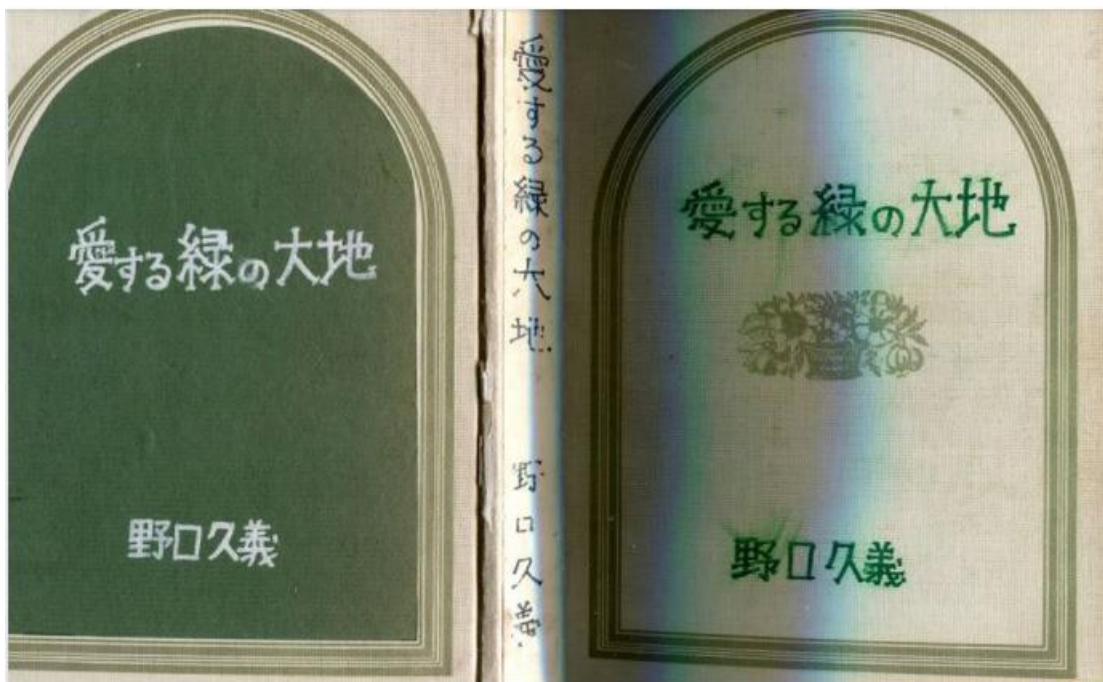
現在投稿している野口さんの手書き本は、表紙と裏表紙のデザインが素晴らしい。あたかも鏡像のように色が呼応している！ また、遊び心満点なのが最後の出版年月日などを書いたページだ。あたかも普通の出版物のようなスタイル。凝っている。

最初の写真は、手書き本「愛する緑の大地」の表紙、背表紙、裏表紙。裏表紙の色は表紙の反転になっている。中央の鉢植えの絵は省略されているが、それでも素晴らしい。

2番目の写真は、最後の出版年月日などを書いたページだ。あたかも普通の出版物のようなスタイル。

3番目の写真は、3章の中扉と挿絵。この本には段落などの随所にミニ挿絵があって、目を楽しませてくれる。

4番目の写真は、現在の野口久義さん。2017年12月31日、川崎撮影。初めて野口ペンションに泊まった時だったろうか。



オーナー若き日の足跡 No.13 川崎泰照さんの face book より

【野口久義著『愛する緑の大地』（11）】

3、四月のたより〈6〉

4月24日（水）

サレーブにやわらかい霧がゆっくり流れている。仕事を始めると、すぐ霧の中からヘルナンがぬっと顔をだした。きょうはジュシイで薪割りをやるそうと一緒に下った。

ぼくらは作業衣のまま税関を通ることになってしまった。しかし、何もおこらなかった。

午前中は仔牛を近くの牧草地に放し、午後はスクリュウ型の電動薪割り機で薪割りをやる。

帰りはシャモニー街道の国境の街アネマスよりサレーブの稜線の道に入って帰る。頂上付近から雨上がりの澄んだ大気を隔ててネオンの輝き始めたジュネーブの街とレマン湖がみごとな美しさだった。

牧草地の露を踏んで山荘へ帰るころ、月の光が露の玉を青白く光らせている。サレーブの夜は幻想的で恍惚の世界だ。

4月25日（木）

急激な冷え込みでベッドから離れるのが辛い。気温の変化がはげしいこの頃だ。

ジュシイでの仕事だ。ジュシイにはなつかしい日本からの便りが届いていた。遠く離れていても、力強く励ましてくれる先輩がいるということは、どんなに心強いことか知れない。

夕食後、ヨーロッパへきて初めての給料をもらう。とてもうれしい。

帰路サレーブの稜線の道で車の前にウサギが飛び出し、ライトのあかりのところを懸命に走り出した。かわいそうなのでスピードを落としてあげたが、あまりの可愛らしさに四人共腹の皮が振れるほど笑ってしまった。カーブのところウサギは林の中に消えた。

ウィーンに行ったときもそうだったが、『鹿に注意』という標識がずいぶんあった。日本では鹿やウサギのかわりに人間が平気で飛び出してくる。国民性からか、一秒を争う時代だからか、人の車まで注意が行き届かないのか。ヨーロッパへきてから道路で遊んでいる子供たちの姿をみかけなかったし、横断歩道でさえあわてて渡る人を見かけなかった。もちろん警笛など鳴らしたこともない。日本人はもっとゆとりをもって生活した方がいい。ゆとりのある生活とは贅沢な暮らしをすることではない。たとえ貧しくとも日々を楽しく明るく有意義に生きることなのだ。

劣等感を持ったり、あわてたりしても、自分の心をなお暗くさせるだけだし、地位やお金のことばかり考えていると、いつか自己中心になってしまうんだ。

この間、コローシュへ下る途中、車と車が接触して双方共傷ついてしまった。ぼくらのもう傷だらけだからよいが、相手のは新車だった。しかし、双方が窓から顔をだし「私の不注意をお許し下さい。」と言って済んでしまった。それも笑顔のうちに。これが日本だったら……。ヨーロッパでは鑑賞用ではなく、あくまでも実用的なものなのだ。あの人の笑顔が声が、ぶつけてしまった相手なのに、心に焼き付き逆に親しみを覚えるのであった。

4月25日(木)

今日は久しぶりにサレーブでの仕事。昼食後のひととき、いつものようにテラスで日光浴を始める。うとうと始めるころ、クワセットからの牧草地を山荘に向かって歩いてくる二つのシルエットが見えた。すぐ早稲田大学教授の近藤先生夫妻とわかり、四人で駆け出して迎えに行った。

ぼくらがあんまり立派な家に住んでいるので、びっくりしていた。

午後の仕事は先生夫妻に見せるために30分ほどやり、あとは放牧地の花の中にすわってシャモニーのこと、夏の山登りのこと、仕事のことなど話しながら笑って過ごした。

夕食は奥さんが心をこめて日本料理を作ってくれた。母を思い出したのは、ぼくだけではなかったろう。6日間の厳しかった登攀(川崎注:ブレッチエール西壁)を終えた日のレビュファ山荘での晩餐が懐かしく思い出されてきた。近藤先生の奥さんの手料理で、夫妻、芳野さん、ぼくら4人でにぎやかに行なわれたのだった。しかし、ぼくにとってシャンデリアの下でもガス灯の下でも変わりはない。問題はそこにいる人たちなのだ。ぼくらの食堂からはいつまでも笑いがとだえなかった。

太陽がジュラ山脈に沈みかける頃、先生夫妻はシャモニーへの帰途についた。牧草地を歩いて行く二人を、ぼくらは見えなくなるまで見送っていた。幸福そうだった。ぼくの20年後また30年後はどんななのだろう。平凡なサラリーマン。いやだ。もっと自由な世界に生きたい。ぼくの国籍は日本ではなくてもいい。地球でも宇宙でもいい。

#### 【敬愛する近藤等先生との山荘での2回目の晩餐】

来訪する近藤夫妻を駆け出して迎える4人。近藤先生への思いが溢れている。

最初の写真は、エギーユ・ド・ミディ南壁レビュファルートを登攀する近藤等。上ではガストン・レビュファがビレイしている。宮崎秀夫撮影。二人の50才誕生日記念山行。1971年8月24日。近藤等著「わが回想のアルプス」（2010）東京新聞刊より。

2番目の写真は、エギーユ・ド・ミディ南壁のクライムを終えた近藤等とガストン・レビュファ。宮崎秀夫撮影。1971年8月24日。近藤等著「わが回想のアルプス」（2010）東京新聞刊より。

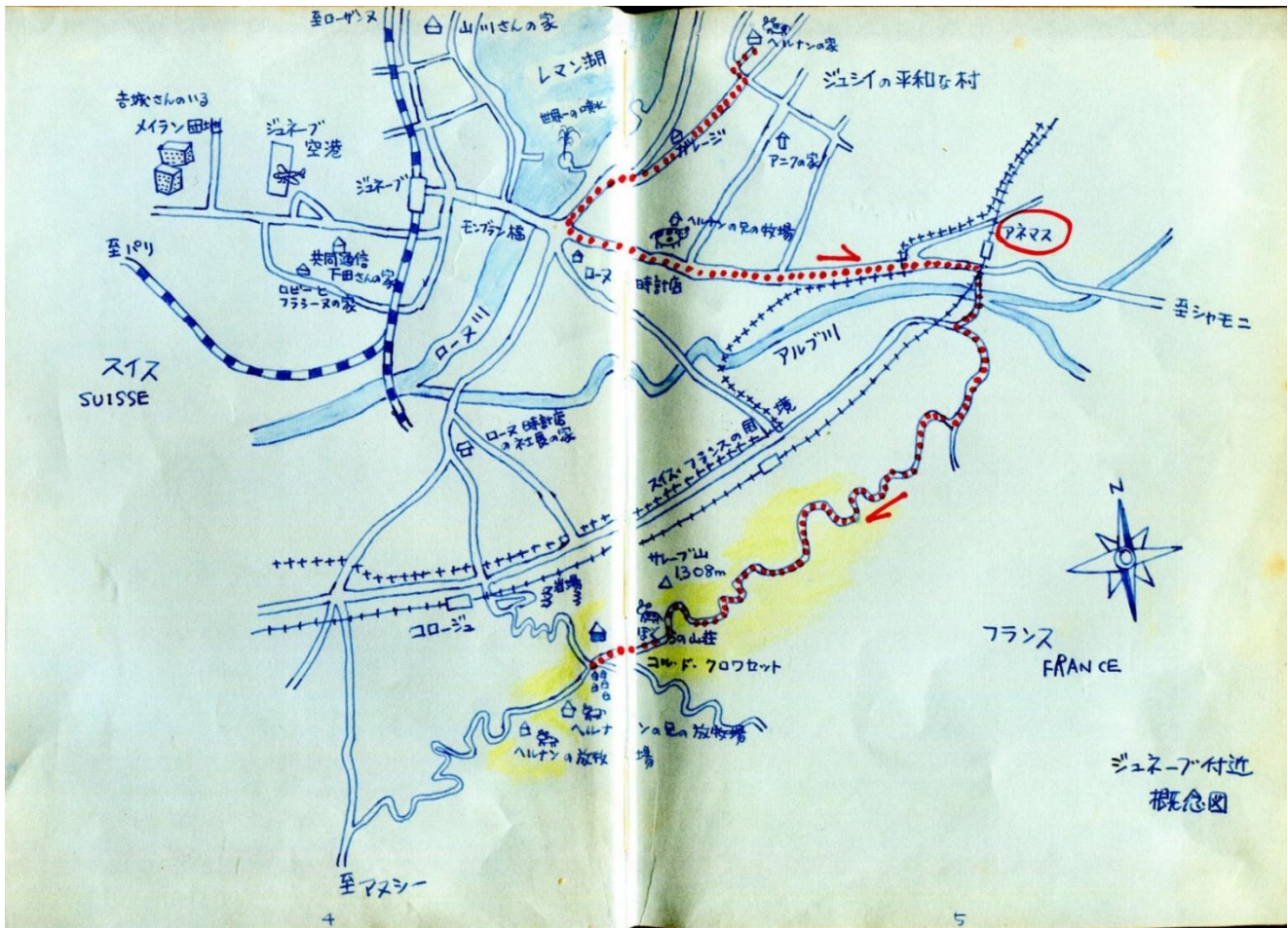
3番目の写真は、モンテローザ山頂に憩う近藤等と宮崎秀夫。宮崎さんについては「日本では三つ峠、小川山、丹沢・広沢寺、松木沢などでの多くのトレーニングにつき合ってもらい、アルプスのピークをいくつも楽しく登ったザイル仲間」と紹介されている。

宮崎さんは現在でもジャック中根さんと新しい岩場を開拓されており、バリバリの現役クライマーだ。写真は、近藤等著「わが回想のアルプス」（2010）東京新聞刊より。

4番目の写真は、1968年3月に野口、南川がブレッチェール西壁登攀後、近藤夫妻を囲んで晚餐会を行ったブレヴァンのレビュファ山荘（ラ・ディ）。近藤等著「わが回想のアルプス」（2010）東京新聞刊より。

5番目の図は、ジュシイにあるヘルナン家の仕事を終え、アネマスを経てサレーブの稜線の道を通って帰った時のルート。サレーブ山の山頂付近では、下界のあまりの美しさに車を止めて外に出て眺めたそうだ。





オーナー若き日の足跡 No.14 川崎泰照さんの face book より

【野口久義著『愛する緑の大地』（12）】

3、四月のたより 〈7〉

4月27日（土）

クロワセットに赤いポストがあって、ぼくらはこのポストに日本への便りを入れることにした。今日もコロージュまで行くのが大変なので何通か入れたのだ。ところが、ずいぶんたってからこのポストは個人の所有物であることがわかって、びっくりしてしまった。

雨の多い休日、フランス語の勉強。お昼にドンドン焼を作って食べた。

夕方から風雨が強まり台風のような感じだった。

4月28日（日）

今朝の空気はとても澄みきっている。夕べの嵐が汚れをみんな洗い流してしまったのだろう。遥か下の緑や菜の花の黄色がういういしい。いつもなら青にしか見えないジュラ山脈も、今日は緑色の肌を見せている。稜線の雪もずいぶん消えた。あまりにも気持ちがよいので食堂のテーブルを外に出して朝食にした。

今日は岩登りをしに行くことにした。1ヶ月ぶりのことだ。登山靴をはいてザイルのついたザックを背負った山男が牧草地を横切って行く。岩場はこの間福田君が見つけたもので、山荘から15分位で来てしまう。岩場は20メートルほどの高さだが、垂直で手強そうだ。白い石灰岩で、まわりの緑とのコントラストが実にいい。さんさんと輝く太陽をあびてのびのびと登った。

午後頂上に広がる草原を大きな声でうたいながら帰った。

4月29日（月）

冷えるなぁと思ってドアをあけてみると、なんと雪が降っている。緑色の牧草の上にふんわりと積もった雪をみていると草餅が食べたくなった。

今日はジュシイでの仕事。雪はサレーブの上だけで下は雨だった。

一日の仕事を終えて帰ろうとするころ、生後三ヶ月になる犬のメリー（スコッチテリア）が放された仔牛に向かってにぎやかに吠えていて、そのあどけなさにみんなで大笑いした。仔牛の方は知らん顔をしている。

コロージュでプロパンのボンベを2本買ったが、あまり高すぎるので、今夜はカマドで薪を燃やしてみた。燃え出すまでは大変でも一度燃えてしまうと火力もあるし、暖房にもなって経済的だった。今宵の“緑の王国”の臨時会議に於いて、昼食と夕食は薪を使って料理するように決まった。ガスの方が簡単であるけど、食事当番は順番なので、別にトラブルもない。薪に火がつかなくても、それで煙が目にしみてもやっぱり順番である。

4月30日（火）

朝から黒いいやな雲がサレーブをおおっている。鍬を担いで放牧場へでかける。最近山荘から遠い所なので、下りで10分ほどかかる。仕事を始めると雨がザーと降り始める。急いで戻ろうとするが、20分もの登りで汗と雨でびしょりになる。おまけに山荘に着くころ、この夕立のような雨はやんでしまった。また降りそうなので、今日は物置で薪割りをすることにした。

明日から5月、若葉が萌え鯉のぼりの泳いでいる日本を思う。

夕食はごはん、生卵、ジャガ芋の味噌汁、焼のり、大根とナスの味噌漬とぐっと日本食で固めてみた。でも、ぼくはやっぱり洋食の方がいい。

（3章おわり）

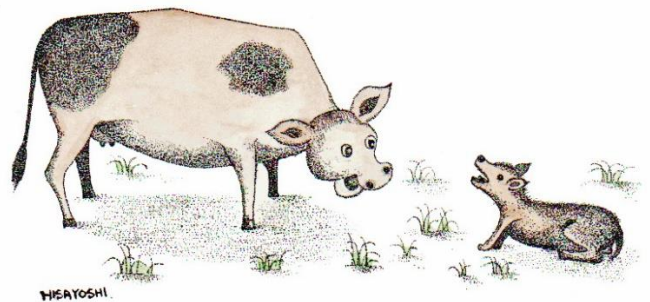
### 【笑いのたえない4人の生活】

スイスでは4月に1,000mの標高で雪になる。

最初の写真は、雪の積もったぼくらの山荘。

2番目の絵は、ザックの雨ぶたにザイルを挟み岩登りに向かう図。

3番目の絵は、山荘の薪ストーブ。お湯を沸かしているのだろう。





強そうだ。白い石灰岩でまわりの緑とのコントラストが実にいい。さんさんと輝く太陽を覗いてのびのびと登った。午後頂上にたがる草原を大きな声でうたいながら帰った。



夕飯はごはん、生卵、ジャガイモ、味噌汁、焼き、大根と人参、味噌漬と、ぐつと日本飯をかためてみた。でも、ほくはやはり洋飯の方がいい。

